令和６年度　多職種連携強化研修会アンケート集計結果

開催日：令和６年 12 月 14 日(土)14:00～

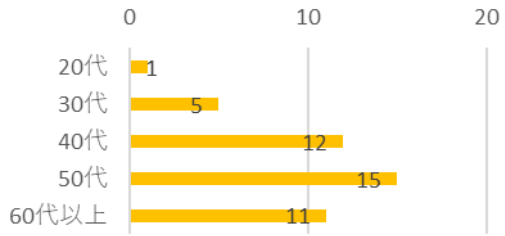
● 参加人数

	申込者数	参加者数	参加率
申込数	83	80	96%

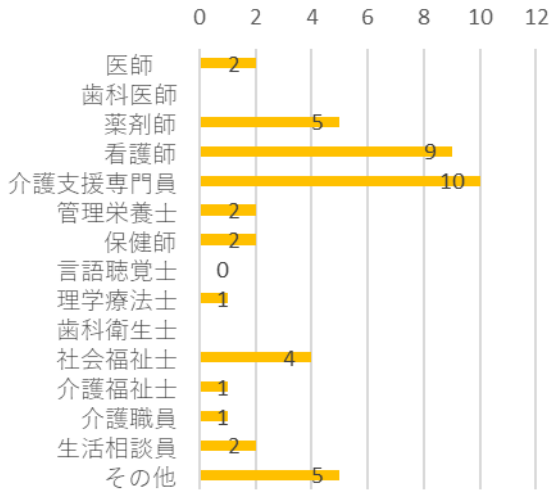
● アンケート内訳

回収数		44
性別	男	11
	女	33
	計	44
回収率		55.0%

● 年代別



● 職種



● 講演時間はいかがでしたか

ちょうど良かった	44
長かった	0
短かった	0
計	44

● 講演内容はいかがでしたか

非常に良かった	30
良かった	13
あまり良くなかった	0
良くなかった	0
計	43

● 今後の活動に活かすことができそうですか

とても参考になった	42
参考になった	0
参考にならなかった	0
どちらでもない	1
計	43

研修を受けての主な感想・意見《抜粋》

・業務においては看取りに関わることが多く勉強になりました。私生活でも人生会議が必要「いっぱい話をしよう」と思いました。

・食べたいものを言える患者様の希望を今まで以上に尊重しようと思った。

・その人の望む最期を、医療が邪魔してはいけない、という視点が最も印象に残っています。とても勉強になりました。

・病院で家族様と関わると、入院をきっかけに介護ができないと退院を希望しないなど、入院の継続を希望される方々をすごく多く拝見します。食べれない→点滴の継続を希望や、喀痰吸引の必要性のある方、転院前に経管栄養、CV などされている方が非常に多く、施設への退院もできず、退院支援が困難に感じることが多いです。先生がおっしゃっていたように、高齢、超高齢の方々に対しての医療について、することによりどうなるのか、ということを医師からきちんと説明いただけると家族様ももっと理解をしていただけるのではないか、と感じている日々です。また、入院すると良くなると思っておられる家族様も多くいらっしゃり、そうではないことを伝えている日々です。

・在宅での患者、家族の要望に応じて、どれだけのことができるのか、とても難しく思っています。内服の必要性を理解してもらえるように、これからも務めていきたいです。 処方内容に関しても、主治医に見直して頂けるように相談していきたいです。

・「亡くなる瞬間は、見てなくてもいい」という言葉が印象的でした。 確かに、亡くなる瞬間はみてなくてもいいと言って頂くと、独居の方でも在宅で看取る事は可能かなと感じた。ただ、「死」というものにしっかり向き合っていないと、「看取る瞬間は、見なくてもよい」という気持ちに家族がなるのは少し難しいなとも感じました。

・研修で学んだ事をみんなで周知し、多職種と連携しながらこの地域でも支援をしていきたい。

・先生の話はとても分かりやすく、マンガや短編ビデオを取り入れ、よく理解できました。

・最近気切の配偶者を亡くしていたのですが、好きだった物を食べさせてあげてたらよかったのに、少し後悔が残った。

・普段の生活から死ぬ事と向き合って、今できることをしていく必要を感じました。

・今日のお話を聞くだけに終わらせず、今後どんな地域をつくっていくか、そのための取り組みを考えて行動に移していくことが大切だと思いました。
・看取り期の利用者様の食事の問題は当施設でも重大なポイントだと考えています。 終末期に近づき少しずつ食べられなくなってきた時、家族様の思い、本人様の思いはどこにあるのか。家族様や本人様にもっと寄り添った看取り介護がしたいと思っていますが、なかなか思うようにいっていないと思います。 最期を迎えられた際、後悔が少しでもないように施設職員として支援していきたいですが、まだまだ経験や知識不足をいつも感じてしまいます。その家族様、利用者様にとってたった一度の看取りをもっと大事に関わって携わっていきたいと思います。 今回の研修を聞いて、ますます看取り介護について学んで、色んな知識を取得していきたいと感じました。
・多職種連携。これからは、栄養士が地域へ出向くと聞いて目からうろこでした。 不要な点滴をやめることが、食べることにも繋がり、どう生きるかということにしっかり向き合うことが大切だと思いました。
・最後に立ち会わなくても良い この一言が、最後を自宅でとの考え方を変えました。
・施設で看取りをしているので　参考に出来る部分は参考にさせてもらいたいと思いました。 利用者さん、家族さんに少しでも寄り添ったケアが出来るように考えていきたいです。
・ミーティングの必要性、再認識しました。ありがとうございました。
・看取りの質を高める８つの方法について、非常に納得させられました。また、職員の研修に取入れ知識の向上に生かしたい。
・亡くなる最後まで食べることにとても共感できました。自宅、施設、病院のどこで最後を迎えたいかは、人それぞれとは思いますが、だからこそ人生会議が大事だと思いますし、亡くなっても納得できる支援について関係者はもっと考えていってほしいと思いました。
・この研修を受けて最後まで食べるということの重要性とそれをどう支援していけばいいのか多職種で考えていきたいと思いました。
・人生会議の大切さを感じました。
・食べることは生きることのところで、できるだけ本人の望むものを工夫して提供できたらいいなと思いました。映像でお寿司とビールを飲むところがすごく感動しました。

●看取りについて

◆日常の業務において看取りに関わることがありますか

ある	33
ない	11
計	44

◆あると答えた方で看取りについて患者や家族と話すことはありますか

必ず話す	16
状況に応じて話す	17
話すことはない	0
計	33

◆「必ず話す」「状況に応じて話す」と答えた方で話すタイミングについて以下のとおりまとめました（同様の意見は１つにまとめています）

病院・施設	・施設入所・転入院時 ・退院前カンファレンス時 ・面談時 ・訪室時 ・利用者様のＡＤＬが少しずつ低下してきて、回復の見込みがないのではないかと施設側で判断した時に看取りの話を少しずつし始める ・体力が落ちたとき、できていたことができなくなったタイミングなと、段階が一つ進むたび ・看取り介護が始まってから ・状態の変化時 ・食事ができなくなった時点
在宅・その他	・訪問時 ・ムンテラ時や状況に応じて ・状態をみながら判断・状態悪化時 ・信頼関係が構築できたとき ・状態によってタイミングは違うが、意思疎通が困難な場合は家族とはできるだけ早い目に看取りについて話すようにしている ・介入時日々の関わりで ・在宅を選択する段階、支援者をコーデイネートする段階で本人の意志の確認、家族の意志確認を行う ・病状によって（介入時から話す場合もありますし、関係性を時間をかけて築く中で話す場合もある） ・不安や、困り事。疲れていないか。今後の状態の予測の説明など ・状態が徐々に悪くなってきた頃に主治医から病状の説明を受けてご家族が看取りの受け入れが出来てから説明する ・本人から強く希望されている方には看取りについて話す 本人から問われる時は今の状態を伝えてどうしたいかを確認している